

サッカー欧州4大リーグへの選手輩出からユースチームの成功モデルを探る[†]

杉山卓也* 中村武彦* 西井良*
菅沼 柁希* 宅野信輔* 千葉裕花*
増田百恵* 三井玲奈*

Exploring the Success Model of Football Youth Teams from the Viewpoint of Producing the Top Four European League Team Players[†]

Takuya SUGIYAMA*, Takehiko NAKAMURA*, Ryo NISHII*,
Masaki SUGANUMA*, Shinsuke TAKUNO*, Yuka CHIBA*,
Momoe MASUDA* and Reina MITSUI*

Abstract

The purpose of this research was to investigate the current situation in which youth teams in Europe are producing football players in strong teams and to explore the success model of the youth teams. The youth teams of the European top four major league division teams were examined, and as a result of calculating the contribution points based on the UEFA club ranking, the first place was Real Madrid youth, the second place was Barcelona Youth. Among the top 10 teams in total points, there were teams that showed high points even if they were not such strong teams. Also, although Manchester City Youth has produced many players, it did not differ much from other teams in regard to total points. In addition, there were teams that promoted many players in their top teams, like Athletic Bilbao Youth. Based on the above surveys, it was considered that the teams that successfully trained players could be classified into the following three major categories.

① Multi-player High Level Type, including Real Madrid youth and Barcelona youth, producing many players and operating at a high level.

② Self-Team Contribution Type, including Athletic Bilbao Youth, promoting many players to their own top team.

③ Release to Other Teams Type, including Manchester City Youth, producing numerous players who join other teams

Key words : European, Youth, Football, Soccer

1. はじめに

世界でのサッカーの人気は高く、2018年に行

われたロシアワールドカップ出場をかけた予選には209もの国と地域が参加しており、これは2016年に行われたリオデジャネイロオリンピック

[†]原稿受付 2019年6月13日 原稿受諾 2019年9月26日

*静岡大学 〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836

*Shizuoka University, 836, Oya, Suruga-ku, Shizuoka, Shizuoka, Japan (422-8529)

クの参加国206カ国を上回るものである。アメリカの経済誌『フォーブス』¹⁾によると2016年のスポーツ選手別年収ランキングでは1位がクリスティアーノ・ロナウド、3位がリオネル・メッシとサッカー選手が上位を占めている。そんなサッカー界をリードしているのはヨーロッパである。実際に4年に1度行われるサッカー世界一を争うワールドカップでも2006年からの直近3大会連続でヨーロッパの国が優勝しており、ヨーロッパがサッカー界をけん引していることが分かる。さらに2018年12月に行われたクラブ世界一を決める国際サッカー連盟（以下、FIFA）主催のクラブワールドカップでもスペインのリーガ・エスパニョーラに所属しているヨーロッパチャンピオンのレアル・マドリードが3連覇を達成したとともに、これまでの全15大会で11大会ヨーロッパのチームが優勝しており、ここ6年連続でヨーロッパのチームが優勝していることから、ヨーロッパがサッカー界を引っ張っていることは明らかであろう。

特にスペイン、イタリア、ドイツ、イングランドの4か国には、俗にいう4大リーグである、リーガ・エスパニョーラ（スペイン）、セリエA（イタリア）、ブンデスリーガ（ドイツ）、プレミアリーグ（イングランド）があり、この4リーグは2016-2017シーズン終了時でも欧州サッカー連盟（以下、UEFA）の公式ホームページ²⁾によると、UEFAのリーグランキングTOP4である。さらにFIFA公式ホームページ³⁾によると、この4か国は2017年12月21日現在のFIFAランキングでもTOP10に入っている。

国際スポーツ研究センター（CIES）フットボール・オブザーバトリーMonthly Report 39⁴⁾によると、ヨーロッパでのサッカー選手の労働市場は、クラブ育成選手の存在の減少、海外選手の強い割合、より高いモビリティによって、非制限的になりつつあり、ますます多くのチームのスポーツ競争力が制限され、結果としてより不安定になっていくことで、裕福で構造の整ったクラブが有利になり、さらに手続

きを支配することに懸念が示されている。実際に、CIESフットボール・オブザーバトリーMonthly Report 24⁵⁾によると、今日、外国人選手は、すでに英国プレミアリーグ（2016年64.4%）とイタリアのセリエA（2016年58.9%）に所属する選手の半数以上を占めていると述べている。また、CIESフットボール・オブザーバトリーMonthly Report 33⁶⁾によると、すべてのリーグとシーズンで、チャンピオン獲得チームの中で当該クラブのユースチームでトレーニングを受けたプレーヤーの平均パーセンテージは24.1%で、これは全チーム（21.2%）で測定された割合よりも高い割合であり、持続可能な成功を達成するためにトップレベルのサッカー選手を育成できることの重要性を示唆している。

サッカーにおけるヨーロッパのユースチームを対象とした研究としては、内藤ほか⁷⁾や三澤⁸⁾の研究が挙げられる。内藤ほかは、サッカー発祥の地であるイングランドにおいて、イングランドサッカー全体の構造とイングランドのユースシステムの概要について明らかにしている。また三澤は、ドイツブンデスリーガにおけるユース育成に関して、定量的な分析を行った研究を行っている。その中で、ドイツブンデスリーガ1部のチームの選手の出身ユースチームについて調べ、ドイツのユースアカデミーの育成の質が向上していることを明らかにしている。しかし、上記のようなユースチームに焦点を当てた研究は、一国のユースのみに焦点を当てたものがほとんどである。そのため、1国に対して詳細に研究がなされているが、比較対象がないため長所や短所が明らかになりづらいことが課題の1つであろう。三澤も、他国リーグでの分析と比較を行うことで更なるユース育成の研究を進める必要があると課題を挙げている。

そこで本研究では、育成に成功していると言えるチームはどこかという視点で、ヨーロッパのどのユースチームが強豪国の代表選手や強豪クラブチームに選手を輩出しているのか、現状を調査することを目的とする。

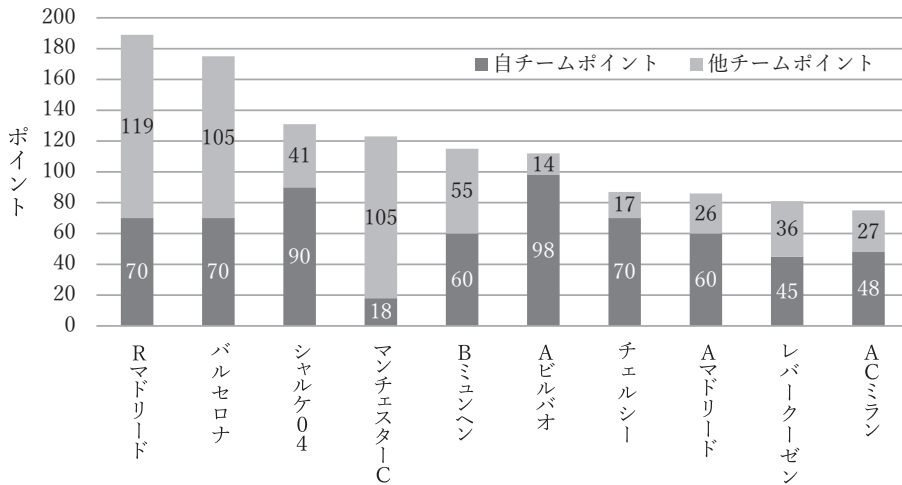


図1 合計ポイント上位10チーム

本研究では、ヨーロッパの4大リーグ（スペイン、イングランド、イタリア、ドイツ）1部に所属する選手の出身ユースチームについて調べ、どのユースチームが多くの選手を4大リーグに輩出しているか調査する。これにより、どのユースチームが強豪チームに多くの選手を輩出しているか成功モデルを検討する。

2. 方法

2.1 調査対象

2016/17シーズンの4大リーグ1部に在籍するチームの選手1,998名（リーガ・エスパニョーラ483名、プレミアリーグ513名、セリエA503名、ブンデスリーガ499名）であった。

2.2 調査手続

Webサイト「Transfer Market」⁹⁾で2016/17シーズンの4大リーグ1部（ブンデスリーガ、リーガ・エスパニョーラ、プレミアリーグ、セリエA）に在籍するチームの登録選手の出身ユースチームを調べた。掲載されていない選手については、過去に所属していたチームの公式HPなどを辿り調べた。強豪チームにどれだけ選手を輩出しているかを比較するために、2016/17シーズンのUEFAクラブランキン

グを上位から10チームずつに区切り、1～10位を10点、11～20位を9点、21～30位を8点…101位～ランキング外を0点というように順にトップチームへの貢献ポイントをつけていき、各出身ユースチームの合計貢献ポイントを算出した。また、各ユースチームの合計ポイントで2014/15シーズン～2016/17シーズンの間にトップチームが1回でも欧州世界一を決める、UEFAチャンピオンズリーグ（以下、CL）に出場しているチーム、1回でもCLに次ぐ欧州の権威のあるヨーロッパリーグ（以下、EL）に出場しているチーム、どちらにも出場していないチームの3群に分け比較を行った。有意差の検定には、IBM SPSS Statistics ver.23を用い、一元配置分散分析を行った。下位検定にはTukey法を用いた。有意水準は5%とした。また、同じくIBM SPSS Statistics ver.23を用い、平方ユークリッド距離を用いた最近隣法によるクラスター分析を行った。長澤・出村¹⁰⁾によると、クラスター分析とは、種々の異なる性質のものが混在し合っている対象のうち、互いに類似したものどうしを集めてクラスター（集落）をつくり、それらの対象を分類する方法を総称したものである。

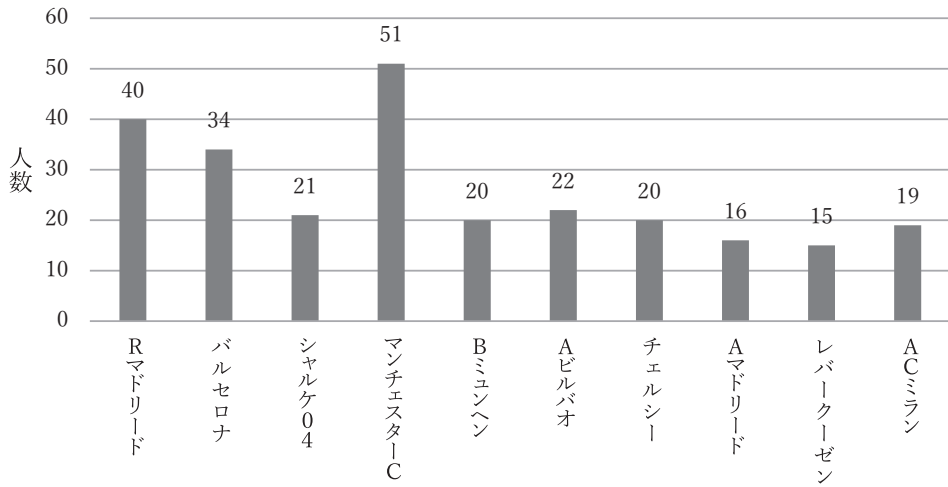


図2 4大リーグチームへの選手輩出人数

3. 結 果

3.1 合計ポイント数について

ヨーロッパの4大リーグであるリーグ・エスパニョーラ、セリエA、ブンデスリーガ、プレミアリーグの2016/17シーズンの1部所属チームの出身ユースについて調査した結果、一番多く選手を輩出しているのは、マンチェスター・シティユースで51人、次にレアル・マドリードユースが40人、マンチェスター・ユナイテッドユースが34人であった。図1は合計ポイント上位10チームの結果を示した。自ユースチーム出身で自トップチームに所属する選手が稼いでいるポイント（以下、自チームポイント）と自ユースチーム出身で他トップチームに所属する選手が稼いでいるポイント（以下、他チームポイント）別にポイントを算出した。その結果、合計1位は189ポイントのレアル・マドリードユースで、2位は175ポイントのバルセロナユースであった。自チームポイントでは、合計ポイント6位のアスレティック・ビルバオユースが98ポイントで1位、次いで合計ポイント3位のシャルケユースが90ポイントで2位であった。他チームポイントでは、レアル・マドリードユースが119ポイントで1位、合計ポイント2位の

バルセロナユースと4位のマンチェスター・シティユースが105ポイントで2位であった。

3.2 4大リーグへの選手輩出人数について

図2は、合計ポイント上位10チームの4大リーグへの選手輩出人数を示したグラフである。マンチェスター・シティユースが51名と最も4大リーグへの選手輩出人数が多かった。調査対象が全78チームであることから、平均すれば、65%もの4大リーグのクラブに選手を輩出したことになる。また、合計ポイント1位のレアル・マドリードユースが40名で2番目に多く、合計ポイント2位のバルセロナユースが34名で3番目に多い結果となった。

3.3 選手一人当たりの獲得ポイントについて

図3は各チームの一人当たりの平均ポイントを示している。合計ポイントが上位に来るようなチームは総じて選手一人当たりの獲得ポイントも高いが、マンチェスター・シティユースについては、調査対象の全78チームの一人当たりの平均ポイントは2.9だったのに対し、多くの選手を輩出しているものの一人当たりの平均ポイントは2.4と平均よりも低い結果となった。このことから、多くの選手を輩出している一方

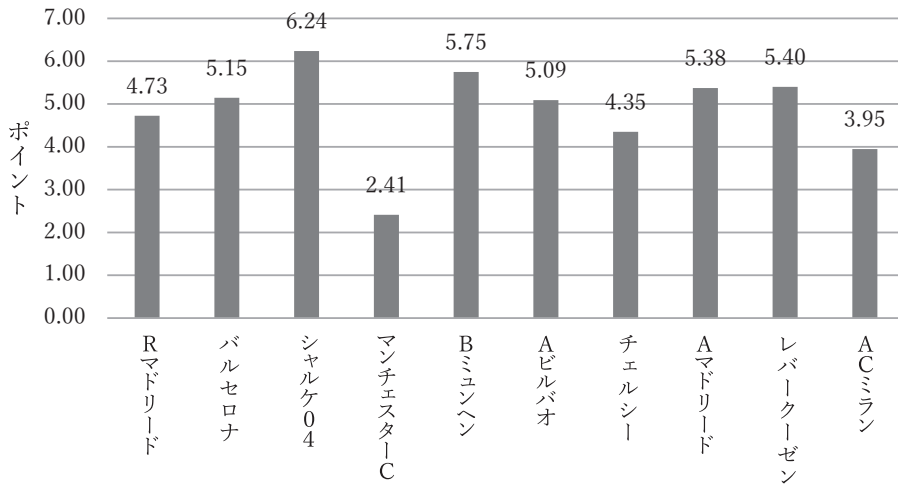


図3 各チームの一人当たりの平均ポイント

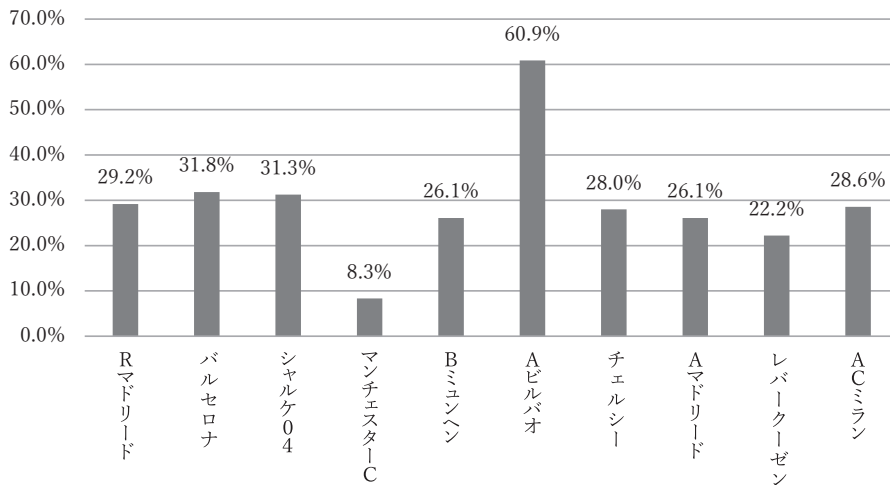


図4 自ユースチーム構成比率

で、CLやELなどで大きな成功を収めたチームではあまり活躍できていないことが考えられた。

3.4 トップチームの自ユースチーム構成比率について

図4は合計ポイント上位10チームの自トップチームの自ユースチーム出身選手割合を示している。軒並み30%前後の構成率であったが、特徴的だった2チームとして、マンチェスター・

シティとアスレティック・ビルバオが挙げられる。マンチェスター・シティは、10%未満の自ユースチーム出身選手割合であり、自ユースチームからの昇格等が格段に少ない結果となった。一方のアスレティック・ビルバオは、他チームに比べ自ユースチーム出身選手が多く、上位10チームの中で唯一半分以上を自ユース出身選手が占めており、自トップチームへの貢献度がかなり高い結果となった。

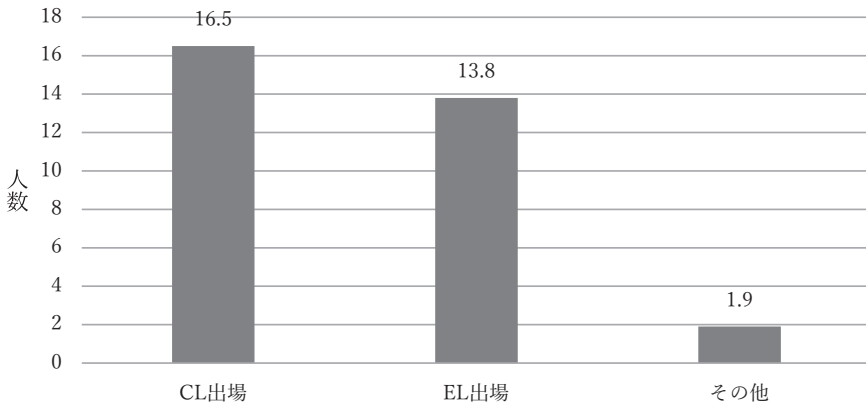


図5 トップチームのCL出場, EL出場, その他チーム別平均輩出人数

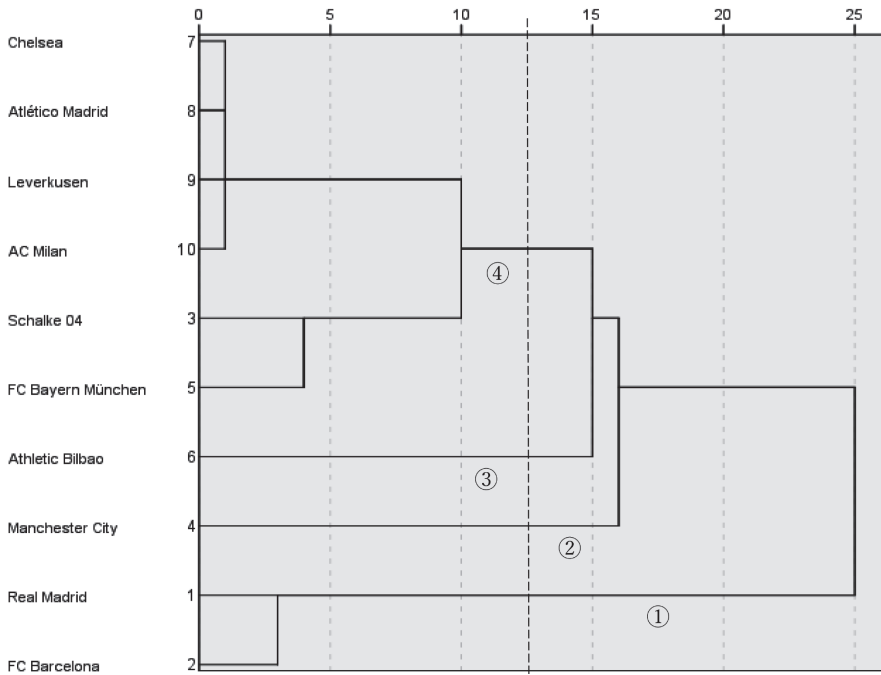


図6 合計ポイント上位10チームのクラスター分析結果

3.5 CL 出場, EL 出場, その他チーム別平均輩出人数について

また、2014/15シーズン～2016/17シーズンの間に1回でもCLに出場しているチーム (n = 24), 1回でもELに出場しているチーム (n = 18), どちらにも出場していないチーム (n = 721) の3群に分け比較を行った。その結果、

平均輩出人数は、CL出場チーム16.5人、EL出場チーム13.8人、その他のチーム1.9人であった(図5)。平均人数を比較した結果、すべての群間で有意差が見られた (F = 407.752, p < .001)。CL出場チームがEL出場チームより有意に高く (p < .001), CL出場チームがどちらにも出場していないチームより有意に高く

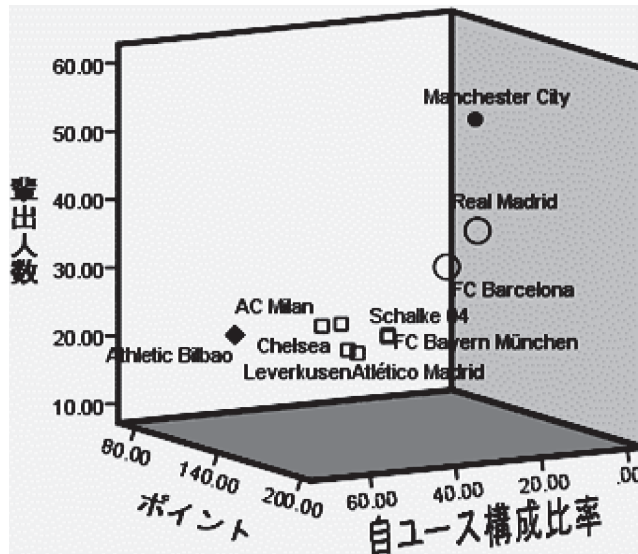


図7 合計ポイント上位10チームの3D 散布図

($p < .001$), EL 出場チームがどちらにも出場していないチームより有意に高い結果となった ($p < .001$)。このことから、チームの競争力が高ければ高いほど、優れたユースチームも持っていることが示唆された。

3.6 合計ポイント上位 10 チームのクラスター分析について

図6は合計ポイント上位10チームを対象とした輩出人数、ポイント、自ユースチーム構成比率を指標としたクラスター分析結果のデンドログラムである。また、左右で見たときに比較的連結していない箇所が長いところに点線を記した。これにより大きく①から④までの4つのクラスターに分けることができる。図7は輩出人数、ポイント、自ユースチーム構成比率を軸とした3D 散布図に合計ポイント上位10チームをプロットしたものである。

図6の①のクラスターにはレアル・マドリードユースとバルセロナユースが含まれた。輩出人数が多く、ポイントも高いチームであった。②のクラスターにはマンチェスター・シティユースが含まれた。輩出人数が多く、ユース構

成比率が低いチームであった。③のクラスターにはアスレティック・ビルバオユースが含まれた。ユース構成比率が高いチームであった。④のクラスターにはそれ以外のクラブが含まれた。合計ポイント上位10チームの中では、平均もしくはそれ以下のレベルのチームであった。

4. 考 察

図1、図2の結果から、合計ポイント1位のレアル・マドリードユースと2位のバルセロナユースは他のチームに比べ輩出人数も多いことが明らかとなった。一人一人が高いレベルで活躍し、輩出人数も多いことから一番理想的な育成の形であると言える。これら2チームのような所謂超ビッグクラブは、毎年CLの出場権が得られるリーグの上位に入っており、CL出場チームに次ぐ成績のチームが出場するELよりも大会レベルが高く、賞金総額はELの約3倍と獲得賞金も多いCLで多くの収入を得ている。2017年に『フォーブス』誌¹¹⁾が発表した世界で最も価値のあるサッカークラブランキングベスト20では、バルセロナは全体の2位である36.35億ドル、レアル・マドリードは全体で3

位の35.8億ドルである。このデータが示すように、資金面で充実していることは明らかであり、選手獲得以外にユースチームに使う資金が他チームより多くなると考えられる。加えて、大会の賞金だけでなくスポンサーとの契約料などの部分でも資金が集まりやすくなることから、ユースチームに使う資金が他チームより多いと考えられる。その結果として、図5のCL出場チーム、EL出場チーム、その他のチームの平均輩出人数の分析結果で有意差が認められたように、よりレベルの高い大会に参加する強豪チームほど資金を育成に充てられることでチームの強化に繋がっていることが推察される。しかし、2017年に『フォーブス』誌発表の世界で最も価値のあるサッカークラブランキングベスト20で1位の36.89億ドルであるマンチェスター・ユナイテッドのように、必ずしも資金面が充実しているからと言ってユース年代の育成が成功し輩出人数が多くなるとは限らないこともあり得る。一方で、資金面が充実しているとは言えないが、ランキング入りしている特徴的なチームがアスレティック・ビルバオユースである。2017年に『フォーブス』誌発表の世界で最も価値のあるサッカークラブランキングベスト20で、アスレティック・ビルバオはランキング外であった。しかし、アスレティック・ビルバオが今回のポイント獲得ランキングで上位に入ることができているのは、ユースの選手をトップチームに昇格させている人数が多いからである。今回の調査では、毎年上位にいるチームは平均6～7人ほど昇格させているが、アスレティック・ビルバオユースは14人と他のチームよりかなり多くの選手を自トップチームに昇格させている。アスレティック・ビルバオは、自チームの目指すサッカーをユース年代からトップチームまで統一することでチーム力を継続的に、一貫的に強化し、UEFAクラブランキングでも37位と上位に位置しているのであると考えられる。アスレティック・ビルバオ公式ホームページ¹²⁾によると、アスレティック・ビルバオはチーム理念として直系の先祖にバスケット出身者

がいる選手のみでチームが構成されている。この理念に従い、ユースチームからバスケット出身者である子を積極的にトップチームに昇格させることや、他クラブから優秀なバスケット選手を獲得することで、チームを成り立たせている。そのため、バスケット出身の人々はチームに誇りを持ち、チームに対し忠誠心を持っていると言われている。このチーム理念によって、アスレティック・ビルバオは戦術的にもメンタル的にも一貫したチーム作りができていることが成功の要因と言えるのではなからうか。このことが合計ポイント112点のうち、自チームポイントではトップとなる98点を稼いでいる理由であると考えられる。また、特徴的であったチームとして、マンチェスター・シティユースが挙げられる。合計ポイントは4位と高く、選手輩出人数は圧倒的な1位である。しかしながら、図3の1人当たりの獲得ポイントでは上位10チームの中では最下位、図4の自ユースチーム構成比率でも最下位に位置している。マンチェスター・シティユースは、自トップチームも含めてCLやELなどに出場するような超ビッグクラブには、それほど選手を輩出できていないものの、自ユースチームで発掘育成した選手はある程度の能力まで引き上げられ、他チームで活躍できるような選手を4大リーグに最も多く輩出し、売却益も出している。これも賛否はあろうが、ビジネスとしてユース育成の成功モデルの1つと言えよう。

また、輩出人数とUEFAクラブランキングに関しても相関分析を行ったが、相関は認められなかった ($r = .302$)。この結果から、UEFAクラブランキングの高い強豪チームが輩出する人数は、各チームの育成や発掘の理念・方法によって様々な形があることを示していると言えよう。

今回の調査では、主に図6を元に育成成功チームを3つのカテゴリーに分けることができた。1つ目がリアル・マドリッドユースとバルセロナユースのように多くの選手を輩出し、多人数高レベル型のカテゴリーである。2つ目が

アスレティック・ビルバオユースのように自トップチームに多くの選手を昇格させ、自トップチームのレベルを上げ、ポイントを稼いでいる自チーム貢献型のカテゴリーである。3つ目がマンチェスター・シティユースのように他トップチームに数多くの選手を輩出している他チーム放出型のカテゴリーである。

以上のように、本調査ではユースの成功モデルは3つのタイプに分類された。しかしながら、現代サッカーを取り巻く環境は常に変化している。多人数高レベル型カテゴリーに含まれるレアル・マドリードとバルセロナの2チームについては、スペインリーグのテレビ放映権料の66%を独占していたが、2016-2017シーズンからスペインプロリーグ機構がテレビ放映権を一括管理し分配方法を改革することで放映権料公平化が進んだことにより、2チームがリーグの中でも突出した存在でなくなることもあり得る。アスレティック・ビルバオについては、バスク人だけで選手を構成する純血主義により輝かしい成績を残してきたが、国際化が進む現代サッカーにおいて、人口200万人の都市の選手だけで勝ち抜くのは難しくなっているため、バスク人の定義を広げることでなんとか補強ができるようにしているものの、リーグでも中位が定着しつつある現状ではCL出場もできず、経営状況も苦しくなってくるため、この自チーム貢献のカテゴリー自体が消滅する可能性もある。マンチェスター・シティについても、2016-2017シーズンより世界的名将与とされるグアルディオラ監督の就任によりトップチームのリーグ成績も就任以来の3年で3位、優勝、優勝と成績を残してきており、世界的名将の薫陶を受けたいとユースチームにも有望な人材がさらに集まってくるのが予測される。今後はこれらのモデルを追随するようなユースマネジメントがみられるのか、また、新たな成功モデルが生起してくるのか注視していく必要がある。

本研究の課題としては、ヨーロッパではユース年代での移籍が可能であるため、選手が所属するチームで育成されたのか、他チームから良

い選手を発掘して移籍させたかまでは調査できなかったことである。次に本研究では、所属チームに対する貢献ポイントを算出したが、チーム内で戦力になっているかまでは考慮できなかった。また、ポイントは2016-2017シーズンのみの結果で算出したため、その年によって変動してしまう恐れがある。

これらの課題に対して、まず調査対象の選手一人一人のキャリアまで調査し、その所属年数なども考慮した分析方法を見出すことが必要である。また、今後はポイントの算出方法を再考し、出場試合数や出場時間を考慮した算出方法をすることで、より正確なデータを収集することが望まれる。また、1シーズンだけでなく、複数のシーズンを跨いで調査することによって、より正確なデータを算出することができるであろう。さらに、フランス、オランダなどのリーグも調査することで、より広範囲で比較することができると思われる。

5. 結 論

本研究の目的は、ヨーロッパのどのユースチームが強豪クラブチームに選手を輩出しているのか、現状を調査し、ユースチームの成功モデルを探ることであった。4大リーグ1部所属チーム選手の出身ユースチームを調べ、UEFAクラブランキングをもとに輩出貢献ポイントを算出した結果、最も高いポイントであったのはレアル・マドリードユースであり、2位がバルセロナユースであった。合計ポイントで上位10チームの中には強豪チームではなくても高いポイントを示すチームがあった。また、マンチェスター・シティユースのように多くの選手を輩出しているが合計ポイントでは他のチームとあまり変わらないチームもあった。また、アスレティック・ビルバオユースのように自チームに多くの選手を昇格させているチームもあった。

以上の調査によって、育成に成功したチームは、出身選手の母数が多く、トップチームで活躍する選手が多いレアル・マドリードユース、バルセロナユースを含む多人数高レベル型、充

実した育成から自チームのトップチームに多くの選手を昇格させているアスレティック・ビルバオユースの自チーム貢献型、他チームに数多くの選手を輩出しているマンチェスター・シティユースの他チーム放出型の3つに大きく分類できると考えられた。

参 考 文 献

- 1) 世界で最も稼ぐスポーツ選手, Forbes Japan, <https://forbesjapan.com/articles/detail/16526>, 2017年6月8日掲載.
- 2) UEFA公式ホームページ, <http://www.uefa.com/>, 2017年12月21日参照.
- 3) FIFA公式ホームページ, <http://www.fifa.com/>, 2017年12月21日参照.
- 4) 国際スポーツ研究センター (CIES) フットボール・オブザーバトリーMonthly Report 39 <http://www.football-observatory.com/IMG/sites/mr/mr39/en/>, 2018年11月.
- 5) 国際スポーツ研究センター (CIES) フットボール・オブザーバトリーMonthly Report 24 <http://www.football-observatory.com/IMG/sites/mr/mr24/en/>, 2017年4月.
- 6) 国際スポーツ研究センター (CIES) フットボール・オブザーバトリーMonthly Report 33 <http://www.football-observatory.com/IMG/sites/mr/mr33/en/>, 2018年3月.
- 7) 内藤翔平, 他; イングランドのサッカークラブにおけるユース育成について (I) - イングランドのユース育成システム -, 大阪教育大学紀要61(2), pp.11-24, 2013.
- 8) 三澤翼; ドイツブンデスリーガにおけるユース育成に関する研究, 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文, 2014.
- 9) Transfer Market, <http://www.transfermarkt.co.uk/>.
- 10) 長澤吉則・出村慎一; クラスタ分析, SPSSによる多変量解析入門, 杏林書院, pp.90-91, 2011.
- 11) 世界で最も高価値のサッカーチーム, Forbes Japan, <https://forbesjapan.com/articles/detail/16517/2/1/1>, 2017年6月7日掲載.
- 12) アスレティック・ビルバオ公式ホームページ, <http://www.athletic-club.eus/en/home.html>, 2018年3月18日参照.